

特集

# 就職先は NPO 働く現場の「今」



「NPOで働く」ことは、今や就職先として普通の選択肢になりつつある。社会の課題解決に直接関わる大きなやりがいは、確かに一般企業とは異なる魅力がある。一方で給与水準や、「労働」と「活動」の境界があいまいなことなど、容易に答えの出ない課題も多い。仕事としてNPOを選んだ人、受け入れた現場双方の取材から、NPOスタッフが働く現場について考えたい。

【特集チーム】久保友美、杉浦健、筒井のり子、永井美佳、林寛人、増田宏幸、村岡正司、百瀬真友美

## 「NPO」で働く人の意識とキャリア形成



「NPOで働く、座談会」の様子。聞き手は浜松NPOネットワークセンター事務局長小林芽里さん

企業や公務員とは違う、「非営利」で働くという選択、生き方

2017年1月31日、浜松NPOネットワークセンター主催による、「NPOで働く」座談会」が開催された。

〔注1〕「有償ボランティア」と称し賃金以外の名称で報酬が支払われていても、労働者が存在するとみられる場合がある。例えば従事者が時間を指定されて働いている場合は、使用者の指揮命令の下にあるとして労働基準法上の「労働者」に該当する可能性がある。該当すると、最低賃金額以上の賃金を支払う必要がある（参考：「雇用創出企画会議第二次報告書」『コミュニティ・ビジネスの多様な展開を通じた地域社会の再生に向けて』2014年6月18日、厚生労働省）。

〔注2〕2010年に作成されたNPO法人会計基準によると、ボランティアは、現金や資産の寄付と同じく非営利組織が獲得する寄付の「類型である」と捉え、無償又は著しく低い対価でボランティアの受け入れをした場合で、「客観的に把握することができると見られる場合」には、財務諸表の注記に加えて、活動計算書へ計上することができる。活動計算書に計上することを選択した場合には、活動計算書の経常収益の部に「ボランティア受入評価益」、経常費用の部に「ボランティア評価費用」の科目を設けて表示する。借方からみれば、ボランティアは、有給の労働と同じく事業費や管理費に組み入れられたり、資産の増加につながったりする。一方貸方の収益面であれば、ボランティアも含めた、当該団体が受け入れた寄付の全容を活動計算書上で把握できる。

結局会社を辞めて、NPO（コミュニティ・ビジネス）の道に入りました」「自分もいつかは何かの分野で社会的企業を起業したいからNPOに就職しました」

就職の動機も思いもさまざまだが、

登壇したのは20代後半〜30代前半の4人のNPOスタッフ。創業者や現役経営者ではない。新卒、転職を含め、NPOに就職する道を選んだ、まさにNPOで働く人たちが。「もともと自分も当事者としてボランティア活動に関わっていて、学校を卒業して、そのままNPOに就職しました」

気になることは、そこで生活ができるかどうか。

「一般企業で働くよりも労働環境は安定している」「もちろん一般企業の方が給料は高い。人並みの生活を希望するのならそっちの方がいい」「いったん企業に就職したものの、さまざまな理由でやりたいことができなかつた人はNPOに来ればいい」

このままずっとNPOで働き続けたいか、という質問に対しては、「ずっとここにいて、スキルアップを図っていききたい」という答えもあれば、「転職も考えているが今すぐではない」という回答も。

しかし、いずれもNPOの仕事自体に対しては、「誠実だ」「成果が出る」「キャリアとして認知される」「多様な人材と交流を図ることができる」とおおむね高評価だった。

NPOで働くことに関する課題について、浜松NPOネットワークセンター代表理事の井ノ上美津恵さんはこう語る。「NPOで働くといつても、いろいろな形態があります。いわゆる『有償ボランティア』（注1）についても、その捉え方が曖昧なのが現状です。会計に『ボ

NPOで人がどう生きていくかに繋がるキャリア形成

東海地域のNPOやNGOなどの民間非営利組織のスタッフ・役員で作るネットワークである東大手の会（愛知



# 私のいちばん長い日

第18回

**あ**れは、介護送迎の車を運転中に流れてきたNHKのラジオニュースだった。「昨日、三重県名張市で市民活動をしている人たちの集まりがあり、300人で交流会が行われました」というもの。その日は1998年9月13日。市民活動、ボランティア活動に取り組んでいる仲間（行政も）で集まろうと企画したのが「伊賀の国 市民活動交流会」。それは、施行を12月に待つ特定非営利活動促進法（NPO法）を祝つての出来事だった。伊賀を中心に津や四日市、伊勢といった三重県内からの参加者に、滋賀県も加えて揃いも揃つたり300人。当時の「NPO熱」に罹った人たちの交流は夜が更けるまで続いた。

この一大イベントには、幾つかの伏線があった。大きかったのは、当時の三重県政。北川正恭知事のもと、NPO準備室を設置。あの名物室長、出丸朝代さんと森西宏巳さんがいた。1997年の春、2人はわざわざ赤目の森を訪ねてきて、「協力してほしい」と私に頭を下げた（拙著「里山の伝道師」に詳しい）。その努力で、市民活動に取り組んでいる人たちが集まった。今では嘘のような話だが、隣の町々で活躍している人たちが初めて対面した。それほど、当時の市民活動は視野が狭かった。そんな中で、彼女たちは私たちに「福井・滋賀・三重 市民活動フォーラム」の実行委員をやってほしいと依頼する。当時の私たちは、凄くとげとげしていたのでいろいろあったが、滋賀を皮切りに三重、福井各県で開催（3年間）できて、大いに育てられ、自立できた。この時に出会った多くの同志たちとは、今でも固い絆で結ばれている。98年には、NPO法の施行条例を設置するため三重県NPO研究会を立ち上げ、公開討論も行った。春から始まった公開討論は、県庁講堂で口の字に座った委員26人を県民300人で取り囲むという、県政史上初めての手法。その条例づくりは大きな関心呼び、8回の審議を経て議会で承認され、役目を終えた。「この条例は……特定非営利活動法人制度の『公正な運営の確保』を図るため……云々」。

## NPO病に罹患して、明るい明日が見えた



1954年生まれ、鳥取県出身。生後半年でポリオに罹患。日本福祉大学を卒業し、三重県の小さな診療所の事務長兼ケースワーカー勤務。バブル期にゴルフ場反対運動の中で、環境保全型施設「リゾート赤目の森」を建設（現社長）。コンズ刊「里山の伝道師」著者。

「あのときは、本当に困った……」「あの一言で、救われた……」「あのアイデアが、出発点だった……」市民活動を続けていく中には、曲がり角や分岐点もあれば、大きく飛躍した記念すべき一日も……。市民活動家たちの忘れられない「私のいちばん長い日」とは!?

保』を図るため……云々」。行政にも市民団体にも「公正な運営の確保」を求めた全国でも例のない施行条例が公布されただけでなく、まちづくりの主役は「私たち自身なのだ」という意識形成に果たした役割は大きかった。本当にすごい時代だったと思う。NPOに関する講座では、多くの人々が熱に浮かされるように集まり、語り、共感した。そして、本当にみんな、社会が変わってゆくのではないかと思つた。NPOという役割には、「パートナーシップ」「アカウンタビリティー」「アドボカシー」の三つが大切と呪文のように覚えさせられてきた。特に大きな役割を果たしたのは、「パートナーシップ」だと今でも思う。一人一人の生活上で培われた信条はみんな違う。同じような思いの人たちは固まりやすいが、まちづくりに必要な能力やネットワークは、その信条をはるかに超えて思いもつかない人々を結び付けてくれる。それをみんなが体感した。これまでに付き合つたことが無い人たちと肩を組む、歌を唄い、杯を重ねて交流したあの「伊賀の国 市民活動交流会」は、確かに私たちすべてにとって「いちばん長い日」になったと思う。

### うおろ君の気になるセミナー

## Vol.93 「生活支援コーディネーター」って?



まんが ■ ラッキー 植松

**2** 015年4月に介護保険制度が改定され、今年度は3年間の実施猶予期間の最終年度となる。介護サービスの効率化・重点化といった方針のもと、要介護度の高い人に対しては、専門職間の連携強化で支え、軽度の人は従来の画一的なサービスではなく、多様な生活支援サービスを地域で創出する必要性が言われている。とりわけ、後者の推進のために、NPOや民間企業、協同組合などが参画し連携を図る「協議体」とともに市町村に設置が義務付けられたのが「生活支援コーディネーター」である。

生活支援コーディネーターは、①市町村区域、②日常生活圏（概ね中学校区）、③サービス供給主体レベルの三つのエリアで活動することが想定され、生活支援サービスの充実と介護予防（高齢者の社会参加）の推進の二つの視点から、⑦生活支援の担い手の養成、サービスの開発、⑧関係者のネットワーク化、⑨ニーズとサービスのマッチングの三つの役割が期待されている。また、それら地域福祉の推進のための人材が初めて制度として保障されたという意味でも注目したい。

本改正は、「要支援切り」との批判もあるが、利用者が受動的にサービスを受けることで生活を成り立たせていくという発想からの転換であると言いうこともできる。単にサービスの提供だけでなく、地域づくりの視点から福祉に関わることが生活支援コーディネーターの役割であるということが言える。

編集委員 竹内友章

**ウオロ・バインダー、いかがでしょうか?**

VOLO osakavol

ウオロ2年分(12冊)を挟み込めるバインダーです。(ウオロ1冊500円+送料250円)お問い合わせはウオロ編集部 / volo@osakavol.orgまで



後ずさりしながら未来に入っていく人を描く『息の跡』

東 日本大震災の津波で自力で復活させた佐藤貞一さんは、外国語で書いた手記を出版している。そしてこの映画は、そんな佐藤さんの店での様子と、日々、手記を独唱している様子を捉えたものである。佐藤さんは、芯のある強い口調で手記を読み上げ、監督に語り掛ける。「この意味が分かるか？」という監督への問いかけは、カメラを通して観客である私たちに突き刺さってくる。押しつけがましくはないのだけれど、力強い言葉である。佐藤さんはまた、独学で震災について、町の歴史について調べている。新たに得た知識を小森監督と共有し、監督



今月の作品 「息の跡」

息の跡

監督・撮影・編集：小森はるか 編集：秦岳志  
整音：川上拓也 特別協力：瀬尾夏美 プロデューサー：長倉徳生、秦岳志  
製作：カサマフィルム+小森はるか 配給：宣伝：東風  
2016年／93分／日本／ドキュメンタリー  
上映日程等はwww.ikinoato.comをご覧ください

に意見を求める。その反復に、映画を観ている私たちもその土地のこと、震災について考えを巡らせていく。小説家の保坂和志氏は「この人の闘」という著書の中で、主人公が友人の真紀さんについて語った文章でこんな一節を書いている。「真紀さんが一人で本を読んでいるあいだに感じていることは、結局誰も知ることなく真紀さんと一緒に消えていく」。そしてそのことを主人公は「もったいない」と言う。きつと小森監督も同じように、佐藤貞一さんを記録しなければ「もったいない」と思ったのではないだろうか。この時代、この場所、このような人がいたのだ、そのことを丸ごと私たちに伝えるために小森監督はカメラをまわしたのではないだろうか。ややもすれば主人公である佐藤



イラスト：杉浦 健

●今月の館主

しまだりょういち 島田 隆一

2012年、映画『ドコニモイケナイ』を監督。本作で2012年度日本映画監督協会新人賞受賞。その他、『いわきノート』(2014年／編集)、『桜の樹の下』(2016年／プロデューサー)。現在、日本映画大学非常勤講師。「ドキュメンタリー映画って、観るよりも作る方が数十倍面白いよ!」といつも思います。

さんの魅力に押されがちな監督の存在ではあるが、小森監督は映画におけるショットによってそれに応えている。佐藤さんとのやり取りの合間に、ふと映される店内。埃が無い、日が差した一瞬の時間。この時間と空間が、佐藤さんが生きている場所にはあるのだ。そして小森監督は、その一瞬に立ち会っているのだ。ドキュメンタリー映画『息の跡』は、まさに佐藤貞一さんと小森監督の、闘の跡、でもあるのだ。私は小森監督に語り続ける佐藤さんの言葉を聞きながら、「我々は後ずさりしながら未来に入っていくのです」というポール・ヴァレリーの言葉を思い出していた。震災後、多くのドキュメンタリー映画が作られた。その中でも『息の跡』は、後ずさりしながら未来へと入っていく、現代に生きる人々を映し撮った稀有な作品である。

「さたけん家」

大阪・千里ニュータウンの、立ち並ぶマンションに囲まれた商業エリア。「コミュニティカフェ「さたけん家」は、本屋さんの中に併設されてスタートした。昔からの建物を丁寧にリノベーションしたインテリアの温かさは、幅広い支援事業を介して集まった、多世代のスタッフとお客さんが育む「地域の居場所」にぴったりとはまっている。



「さたけん家」の店内。右側にはハンドメイド商品の販売スペースも



取材中に開かれていた「はがき絵教室」



「さたけ教室」の様子

さたけん家  
大阪府吹田市佐竹台2-5-5  
阪急千里線南千里より徒歩9分  
営業時間／11:00～16:00  
(定休日:毎週水・日曜日)  
電話06-6871-7557

水木千代美さんはじめ、自治会や書店オーナーなどが協力して、出会いの場の重要性を形にしたのだ。所在地から名称を付けたカフェは、日ごとにシエフが変わる「1日スタッフ」の形式をとっており、個々の繋がりで集まった地域の女性15〜20人を中心に運営されている。その日を担当するス

タッフは、日替わりランチ(500円)の内容を予算内に収まるよう自由に決める。アットホームな雰囲気、スタッフとお客さん同士の距離も近い。取材日にも、カフェで知り合った高齢の方々が親しげにはがき絵教室を開いている場面に合えた。カフェは食事を提供するだけでなく、「人が繋がる人口」であり、居場所を維持する手段であると水木さんは話す。「地域の困りごとが解決できる場所にしたい」と子育てサークル(おひさまクラブ)や福祉事業所との連携など、いくつかの支援事業を行っているが、毎週金曜日の晩に開く学習支援「さたけ教室」もその一つである。さたけん家で夕食をとってから、隣の市民ホールに移動し、生徒2人に対して先生が1人ついて勉強を教える。小学生の先生は高校生と大学生、中高生の先生は大学生だ。また、夕食の間は「みんなの食堂」として、教室の生徒に限らず利用することができる(小学生300円、中学生400円、大人500円)。「さたけん家が、一人で寂しいときに誰でも来られる居場所になれば」と願う。

編集委員 稲田千紘



障害者運動のバトンをつなぐ

いま、あらためて地域で生きていくために

尾上浩二・熊谷晋一郎・大野更紗・小泉浩子・矢吹文敏・渡邊琢／著、生活書院、2016年、2200円+税

1970年代に始まったとされる障害者運動が転機を迎えている。少子高齢化社会と言われて久しいが、当事者団体も例に漏れず高齢化している。また、先人たちが行ってきた運動の結果、十分とは言えないまでも、当時と比較すると利用できる制度やサービスが増えてきた。その一方で、新たに当事者団体に入るメンバーはそれほど多くなく、いずれの団体も世代交代が喫緊の課題となっている。本書は2014年3月2日に京都市で行われた、第28回国際障害者年連続シンポジウム「障害者運動のバトンを次世代にど

うつなくか? 障害者と社会のこれからを考える」の内容を基に書かれたもの。本誌510号の特集でインタビューに登場した、DPI日本会議副議長の尾上浩二氏も執筆している。本書が書かれた目的は、今まで障害者運動を牽引してきた人たちが相次いで亡くなっている中で、障害者運動を次の世代にどう引き継いでいくのかを考察することである。当事者、介助者、健常者それぞれの視点で、障害者運動の歴史と現在直面している課題、そしてこれからの課題が整理されている。さらには、各章の著者に、難病をテーマに研究している社会学

者の大野氏を加えた座談会も収録されている。全体を通して記されている課題について一例を挙げると、抱えている障害が異なる人同士の間では、いまだに理解し合えていかなかったり、排除したりしてしまう場面がある。また、障害者の運動と難病患者の運動では、スタンスが異なることなどが挙げられている。どの地域でもおおむね冒頭に述べたと同様な状況で、今後なすべきことは何かを検討することは急務だと思われる。その検討に当たって、本書は、当事者・支援者などの立場や年代、障害者運動への関わり方の

強弱といった差異を超えて、歴史や論点について共通認識を持ち、議論を深める一助となると感じた。

生きたかった 相模原障害者殺傷事件が問いかけるもの

藤井克徳・池上洋通・石川満・井上英夫／編、大月書店、2016年、1400円+税



2016年7月26日未明、神奈川県相模原市にある障害者入所施設「津久井やまゆり園」で、死者19人、重軽傷者27人を出した相模原障害者殺傷事件が発生した。事件の衝撃は特に当事者とその支援者にとって大きく、本書に記された当事者、支援者の生の声がそれをまざまざと感じさせる。本書の目的は、様々な切り口が事件を検証することで、障害

者の基本的人権の実現を目指すことにある。日本障害者協議会代表・きょうざれん専務理事の藤井克徳氏をはじめ、東京大学教授の福島智氏、精神科医・立教大学教授の香山リカ氏など、支援者、精神科医、障害者・人権分野の研究者ら様々な分野の専門家が、この事件が発する「問いかけ」に回答する。障害者差別および差別を理由とする犯罪であるヘイトクライム。人間の命に優劣をつける考えである優生思想。精神科医療と司法の役割、福祉専門職の確保と社会保障制度のあり方。多岐にわたる課題について整理し、提起している。

事件発生から半年以上が経過した今となっては、事件について議論を交わすことも減ってきているのではないかと思う。この事件で提起された課題については、当事者やその支援者だけではなく、私たちが社会全体として継続的に考え続けなければならない。本書は事件を風化させないため、また、事件が起こった時に当事者や支援者はどう感じ何を考え、そこから何をくみ取るか考え続けるために大事な役割を果たすと思う。

編集委員 山中 大輔



## 《特集》① 就職先はNPO—働く現場の「今」

《熊本地震災害・熊本発～現地から伝える「被災地の今」》⑪  
避難所運営から始まる住民自治の萌芽  
上田 浩之（熊本市社会福祉協議会）

《ソシオロジックフォーカス～社会学の視点で世相を深読み》⑫  
子どもが生まれて出会った人びと  
工藤 保則（龍谷大学社会学部教授）

《実録・市民活動「私のいちばん長い日」》⑬  
NPO病に罹患して、明るい明日が見えた  
伊井野 雄二（NPO法人赤目の里山を育てる会 理事長）

《うおろ君の気にな～るゼミナール》⑭  
「生活支援コーディネーター」って？

《V時評》⑮  
1. 誰と「ともに生きる」のか？  
2. 問われる一人ひとりの主体性  
「SDGs／持続可能な開発目標」

《マーケティングは愛だ—NPOのための入門講座》⑰  
目標と指標を設定する！  
長浜 洋二（株式会社PubliCo 代表取締役CEO）

《現場は語る～コーディネートの現場から》⑲  
ボランティアコーディネーションの価値を表現する  
評価基準の指標開発  
棟木 美緒（大阪ボランティア協会 ボランティアコーディネーター）

《市民活動の暦（こよみ）～4月、5月にあったこと》⑳  
20年前……「湘南ふくしネットワーク」結成

《U35》㉓  
教育を考えることは、どう生きるかを考えること  
武田 緑さん（一般社団法人コアプラス 代表理事）

《この人に》㉕  
だるま森+えりこさん（総合工作芸術家）

《アゴラ/シネマ/ライブラリー》㉗  
「さたけん家」／「息の跡」／書籍紹介

《アートで市民活動—マチ・ヒト・ココロを元気にする Community Art》㉙  
「平和の願いを水にたくして」プロジェクト  
高嶋 敏展（写真家、アートプランナー）

### マチ・ヒト・ココロを元気にする Community Art

## 「平和の願いを水にたくして」プロジェクト

（島根県松江市）



たかしま としのぶ 高嶋 敏展

写真家、アートプランナー。「街にアートの種を蒔く」が活動テーマの「どこでもミュージアム研究所」代表。1972年島根県生まれ。96年大阪芸術大学卒。大学3年の時、阪神・淡路大震災の被災地を見たことで、故郷で芸術活動をする事を決めた。当時企画した被災地自身がレンズ付きフィルムで被災地を撮影する「被災者がみた阪神淡路大震災写真展(95年～)」は現在も続いている。街や歴史的建物と人々の思い出を絡めたアートプロジェクトや作品展が得意技。活動が多岐にわたるため「たしか本業は写真家?!」とよく紹介される。

戦後70年にあたる2015年の夏、キネマ倶楽部は「アオギリにたくして」という作品の上映会を企画した。広島原爆の語り部で被爆者の故・沼田鈴子さんの実話を元に作られた映画で、主人公は被爆



た団体で、当初は市民上映会を主催していた。今は活動の幅を広げ、映画を上映したい市民団体や個人の上映会をサポートする事業を行っている。映画とはなじみが薄い医療、福祉、環境分野などの市民団体がキネマ倶楽部のサポートを受け、松江市では上映会が活発に行われている。

島根県松江市の市民団体「松江キネマ倶楽部」。地方から映画館が消えてしまいうなかで良質な映画を見たいとの思いから結成され

この取り組みはさらに広がり、集められた水は映画で繋がる全国の仲間にも贈られた。例えば8月6日の同時刻に、山形県では山形学院

した自分と被爆アオギリの木を重ねながら生きていく。また、沼田さんたちが残した取り組みにより、実際に今も全国で被爆アオギリの2世、3世の植樹が続けられている。キネマ倶楽部は映画上映に合わせ、松江市に植樹された被爆アオギリ2世の木を使ってイベントを考えた。それは映画を通じて繋がっている全国の団体に呼びかけ、日本中から平和の願いを宿した水を集めて松江のアオギリの木に献水しようというものだ。広島、長崎の平和記念公園、沖縄の基地建設予定地、東日本大震災の被災地などの水や、地元島根県からは戦没者慰霊碑が建つ農園の地下水などが集められ、木に捧げられた。そしてこのニュースは新聞等で大きく取り上げられる。

高校で植樹される被爆アオギリ3世の木に、新潟県長岡市では平和の森公園の平和像とアオギリ2世の木に捧げられた。そして平和の水にはイベント開催の水もつぎ足された。水は平和の願いをつぎ足し続け、バトンとなって次の誰かに受け継がれていく。

もうもろの動きから「アオギリにたくして」を上映した雲南市の市民団体は「雲南アオギリ会」というサポート団体までになった。一滴の水は広がり、繋がって、さらに広がりをみせている。

こんなキネマ倶楽部の取り組みを知った同じ島根県雲南市の市民団体も「アオギリにたくして」の上映会を企画した。献水式に使われた水に雲南市出身の永井隆博士（長崎の鐘）「この子を残して」などの作者）ゆかりの水が含まれていた事が開催のきっかけになった。雲南市の上映の話を聞いた「アオギリにたくして」の制作プロデューサーの中村里美さんは永井博士について勉強し、今まさに次回作として永井博士と雲南市をテーマにしたドキュメンタリー映画作品を製作中だ。この作品は永井博士の母校、飯石小学校が廃校になったことから、永井博士が残したものを地域でどうやって受け継いでいくかを追いかけている。

この取り組みはさらに広がり、集められた水は映画で繋がる全国の仲間にも贈られた。例えば8月6日の同時刻に、山形県では山形学院

### editor's note

◎発行者 牧里 每治  
◎編集責任者 永井 美佳  
◎編集委員長 増田 宏幸  
◎編集委員 浅野 信之、阿部 太極、磯辺 康子、福田 千紘、大島 一晃、影浦 弘司、工藤 宏司、久保 友美、芝崎 美世子、神野 武美、杉浦 健、大門 秀幸、竹内 友章、垂井 加寿恵、千葉 有紀子、筒井 のり子、永井 美佳

中田 万葉、華房 ひろ子、早瀬 昇、牧口 明、村岡 正司、百瀬 真友美、山中 大輔、山野 瞳、山本 佳史  
メーカー勤務、ライフコーチ、大阪ボランティア協会常務理事、たかつき市民活動ネットワーク副理事長、大阪ボランティア協会常任運営委員、編集ラボ・ハンドレッド、団体職員、会社員、市民社会ドゥタンク代表  
◎編集 編集ラボ・ハンドレッド  
◎デザイン/DTP ADOアサノデザインオフィス  
◎校正 村岡正司  
◎発送協力 トミの会 / 元久の会 / 梅田 茂 / 岸田 和弘 / 中野 伊津子 / 福満 奈都 / 吉中 広子  
◎事務局 大阪ボランティア協会「ヴォロ」編集部 阿部 太極

●広告掲載のお申し込み、記事内容について [TEL] 06-6809-4903 [FAX] 06-6809-4902 [E-mail] volo@osakavol.org 担当/ヴォロ編集部  
●購読のお申込み、定期購読の宛先変更 [TEL] 06-6809-4903 [FAX] 06-6809-4902 [E-mail] books@osakavol.org 担当/岡村豊子  
●定期購読のご案内 1年間(6冊) 3,000円(送料、税込)



\*本誌の発行費用の一部は大阪府共同募金会の助成を受けています。

ヴォロ(Volo)4・5月号/通巻512号  
2017年4月1日発行

◎発行所 社会福祉法人 大阪ボランティア協会  
〒540-0012 大阪市中央区谷町2丁目2-20 2F  
市民活動スクエア CANVAS 谷町

◎印刷所 デジタル総合印刷株式会社  
本誌掲載記事の無断転載を禁じます。  
◎社会福祉法人 大阪ボランティア協会

### 編集後記

◆低成長、少子高齢化、人工知能、グローバリズム……変化する社会環境の中で、必要な仕事も、可能な働き方も変わるはず。社会に必要な成果を生み出すと同時に、その仕事の担い手にとっても幸せな働き方ができる仕組みが、市民活動の中から現れてくるんじゃないかと思う。初めての職場に一歩を踏み出す人たちがまぶしい季節。(百)